

令和7年6月30日

農推第1343-3号

病害虫発生・防除情報メールサービス

大阪府環境農林水産部農政室

目次	ページ
特に発生に注意(7月)【ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)、野菜類・花き類:コナジラミ類 ぶどう:チャノキイロアザミウマ、きく:アザミウマ類】	1~3
病害虫の発生予報(7月)	4
水稻	5
野菜【なす、ねぎ、野菜類・花き類】	6~9
果樹【ぶどう、もも、みかん、いちじく、果樹類】	9~13
花き【きく】	13
その他注意すべき病害虫【スクミリンゴガイ、トマトキバガ、クビアカツヤカミキリ】	14~15

特に発生に注意(7月)①

ねぎ:ネギアザミウマ(えそ条斑病)



えそ条斑病の葉の病斑



ネギアザミウマ成虫

特徴

- ◆ ネギアザミウマは、高温で少雨の時に多発しやすい。
- ◆ ネギアザミウマは葉を吸汁し、加害部は白く色が抜ける。
- ◆ えそ条斑病は、ネギアザミウマが媒介するIYSV(アイリスイエロースポットウイルス)によるウイルス病である。はじめ、葉身に紡錘型のえそ条斑を呈し、進行すると病斑が癒合拡大し、葉が萎凋・枯死することがある。

防除のポイント

- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するネギアザミウマの防除を徹底するとともに、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ IYSVは一部の雑草にも感染するので、ほ場内や周囲の除草を徹底する。
- ◆ ネギアザミウマの発生を認めたら、プレオフロアブル、アグリメック(アザミウマ類)、リーフガード顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

6月~8月は農薬危害防止運動月間です。農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

次回の情報は7月下旬にお知らせします。

農薬を使用する際には、必ず農薬のラベルを確認してください。

特に発生に注意(7月)②

野菜類・花き類:コナジラミ類



タバココナジラミ※



コナジラミ類成虫※

特徴

- ◆ 葉の汁を吸ってネバネバした液を排泄し、その上にすす病が発生するため、葉や果実が黒く汚れる。
- ◆ トマトやミニトマトでは、タバココナジラミの吸汁による果実の着色不良、TYLCV(トマト黄化葉巻ウイルス)の伝搬等の被害を引き起こす。トマト黄化葉巻病に感染すると、生育の停止・着果不良を起こす。
- ◆ きゅうりでは、タバココナジラミがCCYV(ウリ類退緑黄化ウイルス)を伝搬し、キュウリ退緑黄化病が発生する。

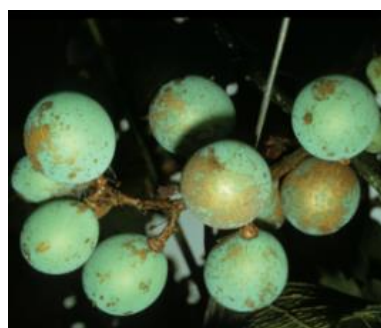
防除のポイント

- ◆ 施設開口部に目合い0.4mmのネットを展張し、コナジラミ類の侵入を阻止する。
- ◆ 施設周辺及び内部の除草を徹底する。
- ◆ ウイルス病の感染株は、施設外へ持ち出し処分する。
- ◆ ウイルス病に対する治療方法はないので、ウイルスを媒介するタバココナジラミの防除を徹底する。
- ◆ ベストガード水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、きゅうりなど)、アグリメック(なす、トマト、きゅうりなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。



トマト黄化葉巻病発症株

ぶどう:チャノキイロアザミウマ



被害果※

特徴

- ◆ 巨峰、シャインマスカット等の大粒系品種で被害が大きくなりやすい。

防除のポイント

- ◆ モスピラン顆粒水溶剤(アザミウマ類)、コルト顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

6月～8月は農薬危害防止運動月間です。農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

特に発生に注意(7月)③

きく:アザミウマ類



ミカンキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 品種により被害の現れ方に差がある。
- ◆ 花卉にはミカンキイロアザミウマやヒラズハナアザミウマなどが加害し、葉には主にクロゲハナアザミウマなどが加害する。
- ◆ ミカンキイロアザミウマはウイルス(TSWV※1、CSNV※2)を媒介する。

※1 キクえそ病の病原ウイルス ※2 キク茎えそ病の病原ウイルス

防除のポイント

- ◆ ほ場内および周辺の除草を行う。
- ◆ きくの残さは放置せず、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ ビニールなどのマルチングにより、土中での蛹化を防ぐ。
- ◆ 施設の開口部に防虫ネットを展張し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 葉の被害に注意し、小発生時の防除を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、ディアナSC(花き類・観葉植物(除りんどう))、アフーム乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

6月～8月は農薬危害防止運動月間です。農薬は適正に使用し、事故・被害を防止しましょう！

病害虫の発生予報(7月)

作物名	病害虫名	予想発生量(7月)
水稲	いもち病	平年並～やや多い
	ヒメトビウンカ(縞葉枯病)	平年並～やや多い
	斑点米カメムシ類	やや多い
なす	すすかび病	平年並
	灰色かび病	平年並
	うどんこ病	平年並～やや多い
	アザミウマ類	平年並～やや多い
ねぎ	さび病	少ない
	ネギハモグリバエ	やや少ない
	ネギアザミウマ(えそ条斑病)	やや多い～多い
野菜類・花き類	シロイチモジヨトウ	やや多い
	ハスモンヨトウ	やや多い
	オオタバコガ	やや多い
	アブラムシ類	平年並～やや多い
	コナジラミ類	やや多い～多い
ぶどう	べと病	少ない～やや少ない
	褐斑病	少ない～やや少ない
	晩腐病	平年並～やや多い
	黒とう病	平年並
	チャノキイロアザミウマ	やや多い～多い
もも	せん孔細菌病	やや少ない～平年並
	シンクイムシ類	平年並～やや多い
みかん	黒点病	平年並
	ミカンハダニ	平年並
	ミカンサビダニ	平年並
	カイガラムシ類	やや多い
いちじく	アザミウマ類	やや多い
果樹類	果樹カメムシ類	やや少ない
きく	黒斑病・褐斑病	やや多い
	アザミウマ類	やや多い～多い

※予想発生量は、平年値(概ね過去10年の平均)に比べて、「多い・やや多い・並・やや少ない・少ない」の5段階で示しています。

※ねぎは令和5年度より調査開始のため、過去2年のデータを平年値としています。

※予報の根拠は下記ホームページ内の「病害虫発生予察情報」の該当月をご確認ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>

水稻

いもち病



葉いもち

特徴

- ◆ 低温多湿で日照不足の時に発生しやすく、降雨、チッソ過多、過繁茂などの場合に助長される。

防除のポイント

- ◆ 田植後の余り苗を水田に放置しない。
- ◆ 密植を避けて通風を良好にするとともに、チッソ肥料の過用を避ける。
- ◆ 常発ほ場でいもち病に登録のある箱施用剤を使用していない場合は、発生前にオリゼメート粒剤、コラトップ粒剤5等を散布する。
- ◆ 葉いもちの発生を認めたら治療効果のあるブラシフロアブル等を散布する。

ヒメトビウンカ(縞葉枯病)



ヒメトビウンカ成虫



縞葉枯病発生株

特徴

- ◆ ヒメトビウンカは縞葉枯病を媒介する。
- ◆ り病株では、新葉が垂れ下がって枯死する(ゆうれい症状)。

防除のポイント

- ◆ ヒメトビウンカが飛来しないように、周辺のイネ科雑草を除草する。
- ◆ 密植を避けて通風を良好にするとともに、チッソ肥料の過用を避ける。
- ◆ 箱施用剤を使用していない場合やヒメトビウンカの発生が多い場合は、本田防除剤のアプロード水和剤(ウンカ類幼虫)やスタークル/アルバリン粒剤(ウンカ類)等でヒメトビウンカの防除を徹底する。

斑点米カメムシ類



アカスジカスミカメ



アカヒゲホソミドリカスミカメ
(イネホソミドリカスミカメ)

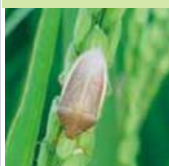
特徴

- ◆ アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ(別名イネホソミドリカスミカメ)、ホソハリカメムシなどの発生が多い。
- ◆ イネが出穂すると畦畔や周辺のイネ科雑草から水田に飛来してくる。

防除のポイント

- ◆ 出穂10日前までにほ場周辺の畦畔や休耕田の除草を実施する。
- ◆ 出穂期～穂揃期にトレボン乳剤(カメムシ類)、スミチオン乳剤(カメムシ類)等を根元まで届くように散布する。発生が多い時は乳熟初期(出穂後10日頃)にも散布する。

イネカメムシに要注意！！



イネカメムシ 原図：農林水産省植物防疫所病害虫情報 第127号

基部斑点米や不稔米被害を起こす。水田飛び込み時期が他のカメムシより少し早めで、開花直後から穂の吸汁加害を始めるので出穂期の防除が必要となる。



ホソハリカメムシ

「水稻・斑点米カメムシの防除」(令和6年7月改訂版)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/hantenmaikame_osaka.pdf

野菜

なす

すすかび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 高温多湿になる施設栽培で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ダコニール1000、ベルコート水和剤等を、発生を認めたら、ファンタジスタ顆粒水和剤、スコア顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

灰色かび病



被害果

特徴

- ◆ 咲き終わった花卉や幼果に感染しやすく、20℃程度の多湿な環境条件や過繁茂で発病が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 適度に換気を行い、湿度を下げる。
- ◆ 開花後の花卉を取り除く。
- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤、セイビアーフロアブル20等を、発生を認めたら、ゲッター水和剤、ファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

うどんこ病



葉表の病斑



葉裏の病斑

特徴

- ◆ チッソ過多で気温が25～28℃、湿度が50～80%で日照不足が続くと発生する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期に、ベルコート水和剤、フルピカフロアブル等を、発生を認めたら、パルミノ、パンチョTF顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

アザミウマ類



ミナミキイロアザミウマ成虫※

特徴

- ◆ 苗からの持ち込みにより本ぽでの発生が多くなる。
- ◆ ミナミキイロアザミウマ、ミカンキイロアザミウマが果実や葉を加害する。なお、ミカンキイロアザミウマの果実被害は、水なすで目立つ。

防除のポイント

- ◆ 葉の被害に注意し、少発生時の防除を徹底する。
- ◆ 開口部を0.8mm目合いの赤色ネットで被覆し、成虫の侵入を防止する。
- ◆ 雑草はアザミウマ類の生息場所となるため、ほ場内および周辺の除草を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、モバントフロアブル、アグリメック、スピノエース顆粒水和剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 露地栽培では、天敵昆虫の温存を図るため、ソルゴー囲い込み栽培などを行う。

ねぎ

さび病



葉の病斑

特徴

- ◆ 葉面にオレンジ色のやや隆起した小斑点が多数できる。
- ◆ 多発すると被害葉が枯死する。
- ◆ 気温が22℃ぐらいで雨の多いときに発生が多い。
- ◆ 肥料切れした畑で発生が多い。

防除のポイント

- ◆ 菌は被害植物上で越冬するので、発病株は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、アミスター20フロアブル、ラリー水和剤、パレード20フロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ネギハモグリバエ



葉の食害痕(新系統)

特徴

- ◆ 葉の内部を幼虫が食い進み、その痕が細長く白い筋になる。
- ◆ 新系統が発見されており、従来に比べて一葉あたりの幼虫数が多く、集中的に葉肉を食害するため、葉が白化したようになる。

防除のポイント

- ◆ 発生初期の防除を徹底する。
- ◆ 発生を認めたら、グレースア乳剤(ハモグリバエ類)、アグロスリン乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



▲新系統について詳しくはこちら

野菜類・花き類

シロイチモジヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ ねぎでの発生が多いが、しゅんぎく、まめ類、なす科野菜、あぶらな科野菜、花き類等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ ねぎでは葉身内に食入し、薬剤が届きにくくなるので、卵塊の除去及び集団でいる発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレオフロアブル(ねぎなど)、グレーシア乳剤(ねぎなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

ハスモンヨトウ



幼虫

特徴

- ◆ なす科野菜、さといも等多くの作物を加害する。

防除のポイント

- ◆ 発生初期(若齢幼虫期)に防除を行う。また、卵塊や集団でいる幼虫の除去に努める。
- ◆ 発生を認めたら、アディオン乳剤(さといも、さといも(葉柄)、オクラなど)、プレオフロアブル(さといも、なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

「ヨトウムシ類の見分け方と防除」(平成13年3月作成)もご参照ください。
https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/yotoumushirui_osaka.pdf

オオタバコガ



幼虫

特徴

- ◆ 果実や茎などに食入する。食害痕のまわりに虫のフンが確認されることが多い。

防除のポイント

- ◆ 幼虫の捕殺は、被害軽減効果大きい。また、摘除した茎葉や果実に、卵や若齢幼虫が付着していることがあるので、ほ場外へ持ち出し、処分する。
- ◆ 果実の食入孔の中にいるため薬剤がかかりにくく、さらに老齢幼虫には薬剤の効果が落ちるため、早めに対応を行う。
- ◆ 発生を認めたら、プレバゾンフロアブル5(なす、トマト、ミニトマトなど)、ディアナSC(なす、トマト、ミニトマトなど)等を散布する。

病害虫発生予察注意報第1号「オオタバコガ」(令和7年5月15日発出)
 もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/84527/2505_r7chuuihou01_ootabakoga_soshin.pdf



卵

アブラムシ類



ワタアブラムシ※

特徴

- ◆ 作物を吸汁し、生育を阻害する。また排泄物にカビが発生し、すす病の原因となる。さらに、各種のウイルスを媒介し、作物によっては致命的な被害をもたらす。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、モスピラン顆粒水溶剤(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこし、しゅんぎくなど)、トランスフォームフロアブル(なす、トマト、ミニトマト、未成熟とうもろこしなど)、ウララDF(なす、トマト、ミニトマト、ピーマンなど)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

果樹

ぶどう

※注意！

一部の農薬は、果粉溶脱を生じるおそれがあるので、幼果期から果粒肥大期の散布を避けて袋かけ以降に使用し、無袋栽培(傘掛けを含む)には使用しない、等の注意事項が掲載されていますので、よく確認してください。

べと病



葉裏の症状

特徴

- ◆ 梅雨時期など、雨が続くとまん延しやすい。

防除のポイント

- ◆ 露地の多発ほ場では梅雨の晴れ間の予防が重要である。
- ◆ 発生を認めたらレーバスフロアブル、ライメイフロアブル等を散布する。
- ◆ 農薬を散布する際に、薬害や果実の汚れを避けるため、傘・袋かけ後は棚上散布を行う。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

褐斑病



被害葉



被害葉(拡大)*

特徴

- ◆ 米国系品種に弱い品種が多く、デラウェア、バッファローなどに発生が多い。
- ◆ 多発すると、葉が早期落葉し、果実の着色が不良となる。

防除のポイント

- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、オンリーワンフロアブル、ホライズンドライフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

晩腐病



被害果※

特徴

- ◆ 新梢伸長期～収穫期に雨が多いと多発しやすい。
- ◆ デラウェアに発生が多く、病原菌は結果母枝、巻きつるなどで越冬する。

防除のポイント

- ◆ 施設内への雨滴の侵入を防ぐ。
- ◆ 笠かけや袋かけを行う。
- ◆ 被害果房は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 前年度の発生状況をふまえ、アフエットフロアブル、オンリーワンフロアブル等を予防的に散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

黒とう病



被害果



被害果(拡大)

特徴

- ◆ 葉、果実、新梢、巻きヒゲに発病し、大粒系に発生が多い。
- ◆ 枝や果実に黒色の病斑が生じ、果実肥大の不良など品質低下につながる。

防除のポイント

- ◆ 雨よけすることで被害が軽減できる。
- ◆ 被害果房や枝は取り除き、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 5月中旬以降はストロビードライフロブル、オンリーワンフロアブル等を予防的に散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

もも

せん孔細菌病



果実の病斑



葉の病斑

特徴

- ◆ 強風、降雨により発生が助長される。
- ◆ 果実では幼果期から未熟果期に感染しやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生を認めたら、バリダシン液剤5、スターナ水和剤等を散布する。
- ◆ 枝、葉、果実の病斑を見つけたら、切り取ってほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 風当たりの強いほ場では防風ネットを設置する。

シンクイムシ類



被害果

特徴

- ◆ ももの果実に食入するシンクイムシ類は、ナシヒメシンクイ、モモシンクイガ、モモノゴマダラノメイガがある。

防除のポイント

- ◆ 被害枝は除去し、ほ場外に持ち出し処分する。
- ◆ 産卵期から幼虫加害期(5月上旬～7月下旬)にモスピラン顆粒水溶剤、アディオン乳剤等を散布する。

みかん

黒点病



被害果

特徴

- ◆ 梅雨時期など雨が続くと発生が増加する。

防除のポイント

- ◆ 発生が見込まれる時期にジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、ストロビードライフフロアブル(かんきつ)等を散布する。降雨が多い場合には、散布回数を増やす。
- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤を使用する場合は、皮膚のかぶれに注意する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

※注意！

ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。

ミカンハダニ



被害葉

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなる。

防除のポイント

- ◆ 6月中～下旬頃に、ハーベストオイル(かんきつ)、スプレーオイル(かんきつ ハダニ類)等のマシン油剤を散布する。
- ◆ 発生を認めたら、スターマイトプラスフロアブル(かんきつ)、マイトコーネフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。
- ◆ 薬剤を散布する場合は、葉裏にも薬液がかかるように散布する。

ミカンサビダニ



被害果*

特徴

- ◆ 梅雨明け後に発生が多くなりやすい。

防除のポイント

- ◆ 発生の初期に、ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤等を散布する。

※注意！

上記2剤は、かんきつ(みかんを除く)における使用時期が「収穫90日前まで」なので注意する。また、皮膚のかぶれに注意する。

- ◆ ジマンダイセン/ペンコゼブ水和剤、エムダイファー水和剤に対して薬剤抵抗性が生じている地域では、7月中旬にコテツフロアブル(かんきつ)、ダニエモンフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

カイガラムシ類



ナシマルカイガラムシの被害

特徴

- ◆ ナシマルカイガラムシ(サンホーゼカイガラムシ)等が加害する。

防除のポイント

- ◆ 幼虫発生期にモスピラン顆粒水溶剤(かんきつ)、トランスフォームフロアブル(かんきつ)等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

幼虫発生期

ナシマルカイガラムシ:5月下旬～6月中旬、8月上旬～中旬

ヤノネカイガラムシ:5月下旬～6月下旬、8月中旬～9月上旬

いちじく

アザミウマ類



被害果

特徴

- ◆ 主にネギアザミウマ、ヒラズハナアザミウマ、ハナアザミウマ等がいちじくを加害する。
- ◆ 果実の横径が2.5～3.0cmの頃から2週間程度の間に侵入する。
- ◆ 果実内に侵入し食害する。食害された果実は内部が変色する。

防除のポイント

- ◆ 成虫発生期にディアナWDG、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ ほ場の周囲を0.8mm目合いの赤色ネットで覆い、成虫の侵入を抑える。
- ◆ 乱反射型光拡散シートをマルチとして設置し、成虫の侵入を抑える。

果樹類

果樹カメムシ類



チャバネアオカメムシ

特徴

- ◆ チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシなどが加害する。
- ◆ 園地により飛来量が大きく異なる可能性があるため、園内を見まわり発生及び被害状況を確認する。

防除のポイント

- ◆ 園全体を目合い4mmのネットで覆い、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、カメムシ類に適用のあるスタークル/アルバリン顆粒水溶剤(もも、かんきつ、ぶどう、かきなど)、アディオン乳剤(もも、かんきつ、かきなど)等を散布する。

花き

きく

黒斑病・褐斑病



病斑*

特徴

- ◆ 雨滴によって感染が拡大する。
- ◆ 病原菌の生育適温は24～28℃ぐらいである。

防除のポイント

- ◆ 降雨の多い場合に発生が多いので、発生前からダコニール1000等を散布し、予防に努める。
- ◆ 被害葉は取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
- ◆ 発生を認めたら、ベンレート水和剤、ストロビーフロアブル等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性が生じやすいので、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布する。

注)ダコニール1000は、花卉に薬液が付着すると漂白・退色などによる斑点を生じる場合があるので着色期以降の散布はさける。また、かぶれに注意する。
ストロビーフロアブルは高温多湿下では、薬害の恐れがあるので使用しない。また、他剤との混用は薬害が生じる恐れがあるので注意する。

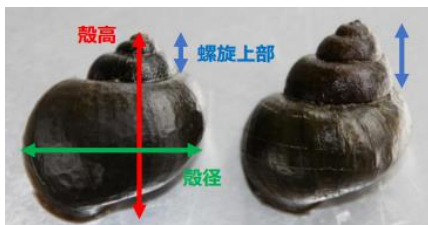
その他 注意すべき病害虫

水稻

スクミリングガイ(ジャンボタニシ)



スクミリングガイ
(ジャンボタニシ)



スクミリングガイ

マルタニシ



ヒメタニシ

注)当該項目「スクミリングガイ(ジャンボタニシ)」の写真は、農林水産省リーフレット「ジャンボタニシによる水稻の被害を防ぐために」より引用。

特徴

- ◆ 成貝の殻高は2～7cm程度。
- ◆ 他のタニシ類に比較して、螺旋上部の長さが短く、殻径と殻高がほぼ同じである(上部写真参考)。
- ◆ 主に田植え直後(約20日後まで)の苗が食害され、欠株になる。成長した稲(5葉期以降)は食害しにくい。

防除のポイント

- ◆ 加害時期(田植直後、約20日間まで)にスクミノン、スクミンバイト3、ジャンボたにしくん等の散布や、浅水管理により重点的に防除する。
注)スクミノン、ジャンボたにしくんを使用後は7日間湛水状態にし、かけ流しや落水はしない。
- ◆ 加害時期以降は、卵塊を水中にかき落とし(濃いピンク色の卵は水中で窒息死する)、成貝は捕殺して、貝の密度を低くする。
- ◆ ふ化直前の白っぽい卵は逆に水中でもふ化するため、水中に落とさず除去する。
- ◆ 用水路からの侵入を防ぐため、取水口や排水口に金網(編目5mm以下)を設置する。



卵塊

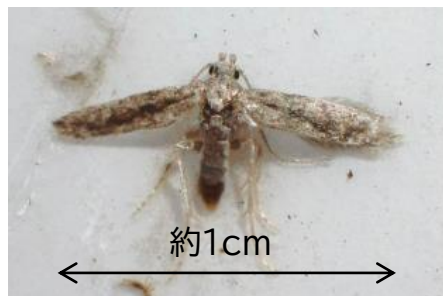
「スクミリングガイ(ジャンボタニシ)生態と防除」(令和7年5月発行)もご参照ください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/r7sukumiringogai-osaka.pdf>

野菜

トマト・ミニトマト

トマトキバガ



府内で誘殺された成虫

特徴

- ◆ 寄主植物はトマト・なす・ピーマン・とうがらしなどの主にナス科植物である。成虫は夜行性で、日中は葉の間等に隠れていることが多い。
- ◆ 幼虫が茎葉の内部に潜り込んで食害し、孔道が形成される。葉の食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変する。
- ◆ 果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に直径数mm程度の穴が空くとともに腐敗するため、品質が低下する。

防除のポイント

- ◆ 発生が疑われる場合は、速やかに病害虫防除グループや最寄りの農の普及課、JA に確認する。
- ◆ 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、侵入を防止する。
- ◆ 発生を認めたら、アファーム乳剤、グレーシア乳剤等を散布する。
- ◆ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。
- ◆ 被害葉や被害果実はほ場に放置せず、速やかに土中に深く埋却するか、ビニール袋などに入れて一定期間密閉して寄生した成幼虫を全て死滅させてから適切に処分する。

「トマトキバガ 生態と防除」(令和6年3月発行)もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/tomatokibaga_osaka.pdf

果樹

バラ科果樹(もも、すもも、うめ等のサクラ属)

クビアカツヤカミキリ



フラス

成虫

防除のポイント

- ◆ 幼虫は樹体内を食害し、4月～10月頃にフラス(幼虫の糞・木くず・樹脂の混合物で中華麺～うどん状に固まる)を排出する。6～8月に成虫が羽化する。
- ◆ フラスの発生を見逃さないようにほ場をよく見回る。
- ◆ フラスが見られたら、千枚通しや針金等でフラスをかき出してからロビンフッド(もも、すもも、うめなど)、ベニカカミキリムシエアゾール(もも、すもも、うめなど)を注入するか、幼虫を突き刺して殺虫する。
- ◆ 成虫羽化期にモスピラン顆粒水溶剤(もも、すもも、うめなど)、アグロスリン水和剤(もも、すももなど)等を散布する。

「クビアカツヤカミキリの生態と防除対策(R7.3改訂版)」もご参照ください。

https://www.pref.osaka.lg.jp/documents/91954/kubiaka_osaka.pdf

幼虫

※原図：(地独)大阪府立環境農林水産総合研究所
*原図：大阪府園芸植物病害虫図鑑(大阪府植物防疫協会)
無断転載を禁ずる。

病害虫防除グループホームページ「防除指針」を参照してください。
(<https://www.pref.osaka.lg.jp/o120090/nosei/byogaicyu/index.html>)
農薬を使用する際は、登録内容を確認してください。